



そこでしか生きられない人間の強さ

東京・小金井市にNPO現代座なる劇団がある。

統一劇場、現代座を経て、NPO現代座となり、今年は創立60周年ということで、ふた月ほど前になるが、「出航」なる木村快の作品を取り上げての記念公演が行われた。この「出航」は1980年代に全国各地で公演されたが、昨年2月に久々に上演して大好評。再演を望む声もたくさん寄せられたこともあって、60周年記念として取り上げられた▼「出航」の初演は1981年で、200海里漁業専管水域設定で壊滅的打撃を受けた北洋漁業の船員たちと、それを支え、港に生きる人たちの話だ。「一旦は海に見切りをつけ、陸の職業へ転身を図った漁師たちが、海を離れ、仲間と別れる辛さを思い知らされる。解散式の日、みんなで海の歌を歌い踊るうちに、孤立に怯えながら逃げ回るよりも仲間と運命を共にする道を選ぼうとする。「いったんは廃船を決意したものの、その解散式で歌い踊る中で、「自分は海でしか生きられない」との思いは大きくなり、結局、魚の取れなくなった海に出航する▼このように、経済・環境の変動に翻弄されながら、展望があるわけでもなく、苦労と闘いながら生きていこうとする、きわめて地味な話だ。ではあるが、幕が下りると同時に万雷の拍手が続き、ハンカチを取り出す人も少なくなく、不思議な感動に襲われた。振り返ればそこでしか生きられない人間が、「結局はよくても悪くても自分の生きる場所は海であることを知って、ふたたび海に挑む姿」があり、生きるためのあらたな戦いに挑もうとする心が、舞台の歌をつうじて観客である私たちにも伝播し、観客も一緒に心で歌っていたのではないだろうか▼この「出航」を思い出しながら、なぜか小農・家族農業で田畑を守る農家の姿が思い浮かんだ。

(土着菌)